

『天主実義』の研究（三）：第三篇現代語訳

柴田，篤

<https://doi.org/10.15017/2328449>

出版情報：哲學年報. 56, pp.1-24, 1997-03-10. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

『天主実義』の研究（三）

— 第三篇現代語訳 —

柴 田 篤

はじめに

本稿は前稿^{〔1〕}に引き続き、イエズス会士マテオ・リッチ（中国名は利瑪竇、一五五二—一六一〇）の著した『天主実義』を現代語訳したもので、今回は第三篇を取り上げる。首篇において「天主が天地万物を創造して、それらを主宰し維持すること」を論じたリッチは、第二篇では「天主に関する世間の人々の誤解を解明すること」を目的として、万物の根源に関する儒・仏・道の三教の考え方について論評する。このように首篇と第二篇は、万物の根源としての天主の存在に関する内容であったが、第三篇と第四篇では万物における人間存在の問題が取り上げられる。第三篇の標題は「人間の魂は不滅であり、鳥獸とは全く異なる」（人魂不滅大異禽獸）であり、三魂説を踏まえて人間の本質としての靈魂について説明がなされ、その永遠不滅なることが論証される。

ところで、既の後藤基巳氏によって指摘されているように、本篇冒頭の1に見える中士の長い発言とそれに続く西士の言葉2は、リッチの手になる『畸人十篇』の第二「人間にとってこの世は仮住まいにすぎない」（人於今世惟僑

寓耳)の「馮大宗伯」(馮琦、一五五八〜一六〇三)の言葉とリッチの応答とほぼ同じである。『畸人十篇』はリッチが実際に中国の士人で行なった問答を記録したものであり、同書第二の文末にはその後まもなくして馮琦が病没したことが記されていることから、後藤氏はこの文章は馮琦が亡くなる万曆三十一年(一六〇三)三月以前に書かれたもので、同年刊行の『天主実義』に急遽付加されたと推定している。³⁾なお、第三篇で問題にされている「靈魂」に関しては、ジュリオ・アレーニ(艾儒略、一五八二〜一六四九)の『性学精述』(一六二四年自序)、フランチェスコ・サンピアス(畢方濟、一五八二〜一六四九)の『靈言蠡勺』(一六二四年自序)に詳しく論じられている。⁴⁾

【注 釈】

- (1) 拙稿「『天主実義』の研究(一)——序説と首篇現代語訳——」(『哲学年報』第五十四輯、一九九五)、『天主実義』の研究(二)——第二篇現代語訳——(『哲学年報』第五十五輯、一九九六)。
- (2) 第三篇の標題は、ミケール・ルッジェリ(中国名は羅明堅、一五四三〜一六〇七)の著した『天主聖教実録』(一五八四刊)の第六章のそれと同じである。
- (3) 後藤基巳著『天主実義』(『明清思想とキリスト教』一八七頁、研文出版、一九七九)。馮琦については、同著「馮琦小論——明末容教士人のありかた——」(同書一六〇頁)を参照。
- (4) イエズス会士の靈魂概念と中国思想との関係については、拙稿「明末天主教の靈魂観——中国思想との対話をめぐって——」(『東方学』第七十六輯、一九八八)を参照。

【凡 例】

- 一 底本は、台湾学生書局「中国史学叢書」所収明版影印本『天学初函』による。
- 二 便宜上、中士と西士の各発言の冒頭に、順に番号を付した。中士が奇数、西士が偶数となる。
- 三 訳語については、以下の点に注意した。
 - (1) 「天主」は、現在、日本のカトリック教会においては「神」と訳すが、原語のまま用いた。

- (2) 「中土」は中国の士大夫を、「西土」は西洋の学者即ち修道士つまりリッチを指すが、煩瑣になるので原語のまま用いた。
- (3) 儒学、殊に朱子学の概念・用語については、そのまま用いたが、必要に応じて説明を施した。
- (4) その他の表現については、できるだけ平易な現代語表記を心掛けた。
- 四 訳文中、「()」は原文にない語を補ったところを、() は説明を施したところを、それぞれ示す。
- 五 中国語として熟さない用語については、原文を注記した。その外、必要に応じて注釈を施した。
- 六 現代語訳に当っては、拙稿「『天主実義』の研究（一）」序説所掲の訳注書等を参考にしたが、特別な場合を除き、一々注記はしなかった。

現代語訳 『天主実義』 上巻（承前）

第三篇 「人間の魂は不滅であり、鳥獣とは全く異なる」

1 中土が言った、「天地の間の万物の中では人間が最も高貴な存在であって、鳥獣など及びもつかないと思われま
す。ですから『人は天地と参たり』⁽¹⁾と言ひ、また人のことを『小天地』⁽²⁾と言うのです。しかし、また鳥獣を観察して
みますと、そのようすは人間よりかえて自由快適であるようです。なぜならば、鳥獣は生まれたとたんに嬉々とし
て自分の力で行動し、「自分を」育ててくれるものに従ひ、傷つけるものからは身を避けます。「鳥獣は」毛や羽や
爪や甲羅を身にまとつて「いるだけで」、衣服や履物も持たず、植えることも取り入れることもせず、貯える倉庫も
炊いたり供えたりする器具も持たないのに、食べるままに成長することができ、思ひのままに休息することができ、
天地の間に楽しんで、常に余裕があります。そこには、人間のように、貧窮と富貴、尊と卑とかの区別もなければ、

なすべきかどうかとか、何を先にすべきかとか、どうしたら功名を得られるかとか、そうした思いに心を縛られることもありません。楽しみ求めて、日々思いのままに行なうだけです。³

「それに比べて」人が生まれるとき、母親は常に腹を痛め苦しみ、胎を出た赤ん坊は口を開いたとたん泣き声を発します。まるでこの世に生まれた災難を既に自分で知っているかのようです。生まれた当初は「体も」弱く、歩いて動くこともできず、三歳になってやっと抱かれなくてもよくなります。⁴ 壮年になると、それぞれに労働があり、苦勞をしないわけにはいきません。農夫は春夏秋冬いつでも田畑を耕し、商人は幾年も山河をめぐり、職人は手足を働かせ、士大夫は昼も夜も精神を疲労させます。いわゆる『君子は心を勞し、小人は力を勞す』とある通りです。⁵ 十年の人生には五十の苦しみがあります。一人の体の病氣となると、「その数は」百どころではありません。医術書を見ると、目の病氣一つを取っても三百いくつもの種類があります。⁶ まして身体全体の病氣となると、とても数えきれるものではありません。そうした病氣を治す薬も、大抵は口に苦いものです。⁷ この世の中でも、大小に関わらず虫や動物は毒具を使って人を傷つけます。あたかも神明に誓うために生け贄を殺して血をすすするようなものです。⁸ 一寸に満たない虫でも九尺の体〔の人間〕を殺すことができます。

人間同志でも互いに傷つけることがあります。凶器を作って人の手足や肢体を切断します。尋常でない死に方は、大抵人が殺したものです。さらに今の人は昔の武器は役に立たないとして、ますます凶悪なものを製造します。ですから、ひどい場合は野も町もすべて殺戮が繰り返されることになります。かりに平和な世の中であっても、何も欠けることのない家族があるでしょうか。財産があっても子孫がないとか、子孫があっても才能がないとか、才能があっても安楽がないとか、安楽があっても権力がないとかいうことがあると、欠けて醜いと「愚痴を」こぼします。大きな喜びや楽しみを持ちながら、小さな不幸におしつぶされるということがしばしばです。生涯憂いばかりで、ついに大きな憂いに塞がれて死んでいくことになります。体は土の中に埋められても、「苦しみから」逃れることができま

せん。ですから、昔のある賢人は我が子を戒めて、『お前は自分を欺いてはならない。良心をくらましてはならない。人が競いあって行き着くところは墓場にすぎない。我々は生きていてはならず、常に死んでいるのだ。生まれてきたとたんに死ぬことが始まる。死と言っているのはそれが完全に終わってしまうことだ。一日が過ぎれば、一日が少なくなつたことで、一步墓場に近付いたことになる』と云っています。これは、でも、外面の苦しみを訴えているだけで、内面の苦しみは、誰が言いあてることができません。

およそこの世の辛苦は本物の辛苦ですが、快楽は偽物の快楽です。苦勞は日常のことですが、快楽はほんの数える程度です。一日の憂いは十年訴えてもきりがありませんから、一生の憂いごとは一生かけても語り尽くせるものではありません。この世にあって人の心は、愛・悪しみ・忿り・懼れの四つの情に悩まされます。ちょうど高い山にある木が四方からの風に吹きさらされるように、片時も「心の」静まることはありません。「また」酒色に溺れたり、功名に惑わされたり、財貨に迷ったりして、各自が欲にかき乱されています。「ですから、ありのままの」自分自身に満足してそれ以外に求めない者などどこにもいません。広い天下や多くの人民を与えたところで決して満足しないのです。愚かなことです。

そのようなことから、人は自らの「踏み行なうべき」道でさえ悟っていないのです。ましてそれ以外の道においては言うまでもないことです。それなのに仏教を信じたり、老子の教えに従ったり、孔子を師と仰いだりと、世の人々は三つの道（教え）に分断されてきました。また好奇心の強い者は新説を立てて別に学派を創りましたので、そのうちに「儒・仏・道の」三教は分かれて三千もの教えになってしまつて、それでもまだ止むことがあります。自分では「正道だ、正道だ」と言いますが、世の中の道は日々益々乱れていきます。上の者は下の者を軽んじ、下の者は上の者を侮ります。父親は横暴で、子供は反抗し、君主と臣下は互いに憎みあい、兄弟は互いに傷つけあい、夫婦は互いにそむきあい、朋友は互いに欺きあいます。世の中、あざむきとへつらい、でたらめといつわりに満ちて、本

来の心を回復することがありません。ああ世間の人々は、本当にあなたも大海原で風や浪が起きて、船舶が壊れて沈み、波間に漂い、浮き沈みしている人々のようです。誰もが自分の危難に気がはやり、他人のことには気がまわらず、折れた板ぎれにしがみついたり、壊れた漂流物に這い上ったり、箱や籠をつかんだり、手当たりしだいしっかり握って放しません、〔結局は〕あいついで死んでいきます。何とも残念なことです。一体なぜ天主は人間をこのような苦難の世界に生まれさせるのでしょうか。鳥獣はとも人間を愛してはいないのではないのでしょうか」と。

2 西士が言った、「おっしゃるとおり」世の中にこのような苦難があるにもかかわらず、我々は愚かにも執着して断ち切ることができません。心が安らぐにはどうしたらよいのでしょうか。この世の苦渋に満ちたありさまはこんなにもひどいのに、世間の人々は愚かにもこの世で大事業を行ったり、田地を開墾したり、名声を求めたり、長寿を願ったり、子孫のことを慮ったりして、篡奪、弑逆、攻撃、併吞と、どんなことでもします。何と危ういことでしょうか。昔、西方の国に二人の有名な賢人がいました。一人はヘラクレイトスと言ひ、もう一人はデモクリトスと言ひました。ヘラクレイトスはいつでも笑い、デモクリトスはいつでも泣いていました。二人とも世間の人々が空虚なものを追求しているのを見て、一方は諷って笑い、他方は憐れんで泣いていたのです。また、ある国の近世の習俗のことを聞きました。今も残っているかどうかはわかりませんが、生まれた子供がいると、友人と一緒にその門口に立って泣いて申します。それは、その子が苦勞多い世の中に生まれてきたからです。「また」亡くなった人があると、その門口に立って喜んで祝います。その人が苦勞多い世の中を去ったからです。やはりこれは生を凶とみなし、死を吉とみなすことです。これらはいずれも非常に極端なことです。しかし、この世の実情を達観した者と言うことができます。

この世は人の「住むべき」世界ではありません。鳥獣の本来の住みかなのです。ですから、「鳥獣は」この世で悠然として満足しているのです。人にとって、この世はしばらくの仮住まいにすぎないのです。ですから、「人は」こ

の世で安心して満足することができないのです。わが友、あなたは儒者ですから、儒教で譬えさせて下さい。今、科挙試験に譬えてみると、この日、士人は苦勞をして、從僕は氣樂であるかのようです。「しかし、果たして」役人（試験官）は從僕に対して温厚で士人に対して冷淡なのでしょう。まぎれもなく、一日も経たないうちに、その人の品級（身分）が決まってしまうのです。試験が終われば品級の高下はおのずとはっきりします。私が思いますに、天主は人を現世に生かして、その心を試して、その徳行の高下を決めておられるのでしょうか。ですから、現世は我々の仮住まいであって、永遠の住まいではありません。我々の本当の住まいは現世にはなく来世にあり、人「の中」ではなく天「主の中」にあるのです。そこに至ってこそ本来の事業を始めるべきなのです。この世は鳥獸の世です。ですから、各種の鳥獸の身体は「頭が下に向き」地を向いています。人は「天の民」ですから、頭を挙げて天を向いています。現世を本来の住みかとする者は、鳥獸仲間です。「ですから、そのような連中が」天主は人間に対して冷酷だとみなすのは、もとより怪しむに足りないことなのです」と。¹⁸

3 中士が言った、「来世に天堂や地獄¹⁹があると説くのは、仏教であって、我々儒者は「そのようなことを」信じてはいません」と。

4 西士が言った、「これは何ということを言われるのでしょうか。仏教では人を殺すことを戒めますが、儒教でも人が法を犯して他人を殺すことを禁じているのですから、儒教も仏教も同じもののでしょうか。鳳凰も空を飛び、蝙蝠も空を飛びますから、鳳凰と蝙蝠は同じもののでしょうか。事物には一つ二つ似たところがあっても、内実は全く異なるものがあります。天主教は古くからの教えです。釈迦は「中国より」西方の人ですから、きっと天主教の説を剽窃したに違いありません。そもそも自分の教説を伝えようとする者は、三つか四つは正しい言葉を混ぜておかなければ、誰も信じてはくれません。釈迦は天主教の天国と地獄の教義²¹を借用して、自分勝手な邪説を伝えたのです。我々は正しい教えを伝えているのに、どうして放っておいて学ばないでよいのでしょうか。釈迦が生まれる前に天主はその「天

国と地獄の」説を説いていたのです。教えを修める者は、来世で必ず天国に昇って無窮の楽しみを受け、地獄に墮ちて止むことのない災いを受けることから免れます。ですから、人の靈魂が永遠不滅である²²⁾ということがわかります」と。

5 中士が言った、「そもそも永遠に生きて無窮の楽しみを受けるといのは、人が望む最大のものです。ただ、その道理は十分明らかではありません」と。

6 西士が言った、「人には魂と魄とが備わっています。両者が完全に備わっていてこそ生きているのです。死ねば、その魄は変化散滅して土に帰りますが、その魂は永遠不滅です。私は中国に来て以来いつも、「人の」魂は消滅するもので、鳥獸と同じであると聞いておりますが、世界²³⁾の他の国や他の教えでは、いずれも人の魂は滅びることのないもので鳥獸とは全く異なっていると考えています。私はこの道理について説明しましょう。どうか虚心にお聴き下さい。

この世に存在する魂には三段階（三種類²⁴⁾）があります。下の段階のものを「生魂」と言います。すなわち草木の魂がこれです。この生魂は草木の成長を助けるもので、草木が枯れてしまえば、生魂も消滅します。中の段階のものを「覚魂」と言います。すなわち鳥獸の魂です。これは鳥獸の成長を助ける上に、目で視、耳で聴き、口で味わい、鼻で嗅ぎ、肢体で物の実態を知覚することができるようにさせるものです。ただ、「ものごとの」道理を推論することではできません。死ぬと覚魂も消滅します。上の段階のものを「靈魂」と言います。すなわち人の魂です。これは生魂と覚魂とを兼ねており、人の成長を助け、物の実態を知覚させる上に、事物を推論し理義を明弁することができるようにさせるものです。人の身体は死んでも靈魂は死ぬものではありません。永遠不滅のものなのです。そもそも知覚というものは、身体に依存したもので、身体が死滅すれば覚魂は働きようがありません。ですから、草木や鳥獸の魂は身体に依存して、それを本来の所としています。身体が滅びるとその魂も一緒に滅びます。「事物を」推論し「理

義を」明弁することとなると、必ずしも身体に依存するものではなく、その靈魂はそれ自体で存在します。身体は滅んでも、その靈魂はなおも働くことができるのです。ですから、人と草木・鳥獸とは同じではありません」と。

7 中士が言った、「どうして、身体に依存するものとそうでないものと」を區別して」言うのですか」と。

8 西士が言った、「身体を成長させることについて言えば、身体がなければ成長することはありません。目の機能によって視、耳の機能によって聴き、鼻の機能によって嗅ぎ、口の機能によって食べ、四肢によって物の実態を知覚します。しかし、目の前に色「を持つ物」がなければ、色を見ることはできませんし、耳の側に声があれば、声を聴くことはできませんし、鼻の側に匂いがあれば「匂いを」嗅ぎ分けることができますが、離れていては「匂いを」嗅ぎ分けることはできません。鹹い・酸い・甘い・苦いの味は口の中に入れば分かりますが、入らなければ分かりません。冷たい・熱い・硬い・柔らかいしやわは身体に触れてこそ感じますが、離れていては感じません。まして、耳に対して同じ声があっても、耳の不自由な人は聞こえませんし、目に対して同じ色があっても、目の不自由な人は見えません。ですから、『覺魂は身体に依存し、身体が減びると一緒に減びる』と言ったのです。靈魂の本来の働あそきは、身体に依存するものではありません。そもそも身体に依存するものは、身体に支配され、「自分で」是非（何が正しいか）を決めることはできません。例えば、鳥獸は食べることで見るものとすぐに食べようと思ひ、自分で「その気持ち」抑えることができません。どうして「自分で」是非（何が正しいか）を明らかにできましょう。人は飢餓の時、道義的に食べるべきでなければ、意識的に食べません。美味しいものが目の前にあってもあえて食べようとはしません。また例えば人は、身体は「遠く」外に出かけていても、この「内にある」心は家のことを思ひ、帰りたという思いをいつも抱いています。ですから、この理義を明らかにする「靈」魂は身体に依存して働いているでしょうか。

あなたが人魂不滅の理由を知りたいと思われるならば、この世にあるものが消滅するには、そうさせるものが必ず

存在するということを悟らなければなりません。消滅の原因は互いに逆らうことによるのです。互いに逆らうものがないければ、物は決して滅びることがありません。太陽や月や星が天上にかかっている、「しかも」繋ぎとめるものがないのに結局滅びることがないのは、互いに逆らうことがないからです。おおよそこの世のすべての物は、火・空気・水・土の四元素²⁷が結びついて成り立っています。しかし、火の性質は熱く乾いていますから、水「の性質」に逆らいます。水の性質は冷たく湿っているからです。空気の性質は湿って熱いものですから、土「の性質」に逆らいます。土の性質は乾いて冷たいからです。両者は互いに敵対し、必ず相手をそこないます。「この両者が」一つの物の中に混在しているならば、その物はどうして永久に平穩でありえましょうか。そこには必ず互いに争いあう時があるでしょう。ただ、一方だけが勝つならば、その物は必ず滅んでしまうでしょう。ですから、四元素「によって作られているところ」の物には、滅びないものはないのです。「それに対して、」そもそも靈魂は「物質を超えた」靈妙なものです。四元素と何の関わりがありませんか。「ですから、靈魂は」何によって滅ぼすことができましょうかと。

9 中土が言った、「靈妙なものは本当に逆らうことのないものです。しかし、どうして人魂が靈妙なものであって鳥獸はそうではないということが解りましうか」と。

10 西土が言った、「その真理を明らかにするにはどうしたら良いでしょう。「人魂と鳥獸の魂とが異なっている」その理由はいくつかありますが、「そのことを」自分で理解できたならば疑いは解けます。

第一「の理由」。形体に属する魂²⁸は身体の主宰となることができないうで、常に身体に使われて、無くなってしまうものです。ですから、鳥獸は生来の欲望に使役されて感情の赴くままに従うだけで、自分で制御することができません。人の魂「すなわち靈魂」だけが身体の主宰となることができ、自己の意志のままに従うものです。ですから、意志がある方向に向かえば、身体力もその方向に向かうのです。かりに私欲があっても、公理の命令には逆らうこと

はできません。⁽³⁰⁾このように、靈魂は身体「を左右するところ」の権限を専有しており、靈妙な存在であって、形体に属するものとは異なっているのです。

第二「の理由」。「一つの生物は一つの心を持つだけです。「ところが」人はというと、二つの心を兼ね備えているのです。「獸心」と「人心」がそれです。これによってまた、「人は」二つの性を備えています。一つは「肉体的本性」で、もう一つは「靈妙な本性」です。もともと、物事が相い反する場合には、そのもとなる性が相い反していることによるのです。人はある事柄に遭遇した場合、二つの思念が同時に起こり、しばしば互いに対立していると感じます。例えば酒色に惑わされる場合、一方では溺れて従おうとしますが、他方ではそれが理に反していることに気が付きます。前者に従うのを獸心と言ひ、鳥獸と区別がありません。後者に従うのを人心と言ひ、天使と区別がありません。人は同一の心で、同一の時に、同一の事について、相い反する二つのことを両立させるわけにはいきません。例えば、目で一つの物を見て、また同時にそれを見ないということはいけません。耳で一つの声を聴いて、また同時にそれを聴かないということはできません。つまり、二つの相い反することは、二つの相い対立する心によるもので、二つの相い反する心は、二つの相い対立する性によるのです。二つの河の水に例えてみるならば、一方は塩辛く、他方は塩気がなければ、「それぞれの」河の源泉を見ていなくても、その源が同一ではないということが解ります。

第三「の理由」。「好き嫌いする」対象となる「物は、必ず「好き嫌いする側の」性と一致しています。ですから、形体に属する性は形体に属するものを好き嫌いし、形体を超越した性は形体を超越したものを好き嫌います。全ての生物の実態を観察してみますと、鳥獸が貪り楽しむものは、「美味しい」味や「美しい」色や肢体の安逸に他なりません。「彼らが」怖れ驚くものは、飢えと疲れと肢体の傷害に他なりません。ですから、これら鳥獸の性は、靈妙なものではなく、形体に属する性であると断言するのです。人が喜んだり嫌ったりするものとなると、形体を持ったものもありますが、徳や善、罪や悪といったものがその最たるもので、いずれも形体を持たないものなのです。です

から、人の性は有形無形の両方を兼ね備えていると断言するのです。これが、靈魂が靈妙であること「の理由」なのです。

第四「の理由」。事物を受け取る物は、必ず受け取る側の形態に応じて受け取るのです。例えば、素焼きの器で水を受ける時、器が円形であれば受ける水も円形で、器が方形であれば受ける水も方形です。世の中の受け取るものは全てがこのようなのです。ですから、人魂が靈妙であることに何の疑いがありません。物事を明らかにしようと思ふならば、自分の心でその事物を受け取るようなものです。その物に形体があれば、人は「その物の」形体を取り除いて「それを」靈妙な状態にします。そうしてこそ、それを心に納めることができるのです。例えば、ここに黄色い牛があり、その本性を明らかにしようと思つたならば、その黄色「という色」を見て、『「これは」牛ではない、牛の色にすぎない』と言ひ、その声を聴いて、『「これは」牛ではない、牛の声にすぎない』と言ひ、その肉の味を見て、『「これは」牛ではない、牛の肉の味にすぎない』と言ひます。このようにして、その声や色や味などの「ように」形体のあるものを取り除いて「こそ」、「牛の性という」靈妙なものになることができるということが解ります。また、例えば百雉ちひざねの城壁を見て「それを」一寸四方の心の中に納めることができるのは、人の心がこの上もなく靈妙でなければ、一寸四方の心の中に百雉の城を納めることなどどうしてできましようか。それ自体が靈妙なものでなければ、受け取るものを靈妙なものにすることなど決してできないのです。

第五「の理由」。天主は人を造る際、「さまざまの」機能を主宰する器官を賦与しています。それは、もとよりそれが属する物と対応しているものです。目は視ることを主宰しますから、その対象となるのは色の相だけです。耳は聴くことを主宰しますから、その対象となるのは音声だけです。鼻と口は臭ぐことと味わうことを主宰しますから、それらの対象となるのは匂いと味だけです。耳と目と口と鼻は形のあるものですから、色と音と匂いと味と同様に形のあるものです。我々の心には「善を好み求め悪を悪にくみ嫌う」意志と「是非善悪を判別する」理性らじせいの二つの機能があ

ります。意志が対象とするものは善だけで、理性が対象とするものは真だけです。善と真とは無形ですから、「善を好み求め悪を惡み嫌う」意志と「是非善悪を判別する」理性の機能も無形で、靈妙なものです。靈妙な性は形体を持つものの性に通達することができませんが、形体を持つものは形体を持たない性に通達することはできません。そもそも人が鬼神や多くの形体を持たない性に明達できるのは、靈妙な「靈魂をもつ」ものでなければ不可能です」と。

11 中士が言った、「もしこの世の中に鬼神が存在しないと云うならば、形体を持たない性も存在しないと云うことになり、誰がそのようなことを明らかにできませんか。「ですから、あなたが説かれた」この五つの理由は確かな根拠ではないようです」と。

12 西士が言った、「たとえ鬼神も存在しなければ形体を持たない性も存在しないと云う者がいたとしても、そういう人は先ず鬼神や形体のない情性を明らかにしてこそ、存在するとかしないとかを断定することができるのです。もしその性の実態を明らかにすることができないならば、どうして存在するとかしないとかが解るでしょうか。例えば、『雪は白くて黒くはない』と言う場合、黒と白の実態を明らかにしてこそ雪が白くて黒くはないということを明らかにすることができなのです。ですから、人の心が形体のない性に通達することができるのは益々明らかです。

第六「の理由」。身体に従属している知は（36）小さな器のように有限で狭いものです。ちょうど雀を糸で木につないでいると、羽を広げて高く翔ぶことができないようなものです。糸がじゃまをしているからです。ですから、鳥獸は知覚することはできませんが、形体を持たないものの実情については通達することができますし、自分自身を振り返って自己の本性的実態を知ることでもできません。身体に従属しない心は（37）この上なく广大であり、小さな器のように限定されるのではなく、ずばりと自由無碍なる境地に到達します。ちょうど雀が束縛している糸を断ち切って、高く天に飛翔するようなものです。誰も阻むことはできません。ですから、人の靈妙「な心」は物の表面的実態を知ることができるだけでなく、その隠された本体まで透徹して、さらに自分自身を振り返って自己の本性的実態を知ることでも

きます。このことから、「人の心が」形体を持つものに属するものではないということが益々はつきりします。ですから、人の魂は靈妙なもので、滅びることがないと言うのです。この道理こそが道を修める基礎となるものなのです。さらに幾つかの理由を挙げて、この「靈魂が不滅であるという」ことを証明してみましよう。

第一「の証明」。人は誰でも名声が伝わり広まることを願ひ、悪名が残ることを怖れるものです。おそらく再び生まれ「て、そこでやり直しができ」るのとはわけが違ふから「で、現世の行ないが後世にそのまま残るから」です。ですから、事を行なう時には、公けの評価にかなって人々から称賛を受けることを願ひます。業績を挙げ書物を編集し芸術を創作し生命を懸けて、名声や榮譽を得て名を後世に残すといったことを求めるもので、生命を捨てることさえ惜しみません。たいていの人はこうした気持ちを持っていますが、愚者にはありません。愚かであればあるほど持っていません。さて死んだ後、一体自分が残した評判を聞くでしょうか。肉体から論ずるならば、骨肉は土に帰り、朽ち果てるを免れません。どうして聞くことができるでしょうか。しかし、靈魂は永遠不滅ですから、残した評判の善し悪しは生きている時と変わりがありません。靈魂は死ぬと消滅するのに、それでも苦勞して名声を求めると説くのは、例えば美しい絵画を置いておいて、目が見えなくなってしまうから観たり、すばらしい音楽を用意しておいて、耳が聞こえなくなってしまうから聴いたりするようなもので、そんな名声など私に何の関わりがありません。それなのに人々はこの求め、死ぬまでやめようとはしません。中国の古礼によれば、孝子や慈孫は四季にその祖廟を修理し、衣装を整え、季節ごとの食物を供えて、亡くなった父母を飲ばせます。もし、両親の身体も精神も全て滅んでしまうのであれば、子供の哀告を聴くことも拝礼を見ることもできません。「だとしますと」我々の『死んだ人に対して生きている人のように仕え、亡くなった人に対して生きていくのかのように仕える』という気持ち⁽⁴⁾は、君主より庶民に至るまで行なうべき重大な儀礼（葬祭）ではなく、子供の戯れごとに過ぎないということになります。

第二「の証明」。上帝は万物を創造しましたが、全ての物には則（道理や規範）が備わっています。⁽⁴⁾「則を持たな

い」無意味な物もなければ、「物のない」空虚な則もありません。試しに幾つかの物の実態を挙げてみるならば、それぞれの本性が欲するままに行なうことを求めるばかりで、それ以外に得難いものを求めようとはしません。そういうわけで、魚や鱈すっぽんは川や淵に潜ることを楽しんで、山や峰に遊ぶことを願いませんし、兎や鹿は山や峰を走ることを喜んで、水の中に潜ることを望みません。ですから、鳥獣の望みは永遠に生きることにではなく、来世において天堂に昇って無窮の楽しみを受けることにもありません。彼らが本性によって願うものは、現世のこと以外ではありません。我々人間は、精神や肉体が共に滅びるといふ奇異な話を常々聞いてはいても、永遠に生きることを望み、安楽な地に憩い、無窮の幸いを得ることを願わない者はおりません。もし、このような思いをすべて満たすことができないならば、天主はこのような思いを人々の心に植え付けるはずがありません。世の中には家や財産を放り棄て、肉親から離れ去り、深山幽谷に住んで、一心に修業する者が沢山いるではありませんか。彼らは現世を重視せず、来世に真の幸福を願い求めています。もし我々の靈魂が肉体と共に滅びるならば、何と無駄なことに心を用いているではありませんか。

第三「の証明」。この世にある万物の中で、人間の心だけが最も広大です。現世の事物を窮めても「人の心を」満足させることがないので、満足させるものが来世にあるということは明らかです。そもそも天主は最高の知恵を持ち慈愛深い方であり、その行ないは人が批判できるようなものではありません。天主は世界の状態に応じて物の本性を造られます。ですから、「天主が」鳥獣を現世に止めておこうと思っっているので、「鳥獣に」与えられている願いはこの現世のことを越えるものではありませんし、「この世の物を」満足いくまで求め、満足すればそれで終わります。〔天主は〕人類を永遠に生かしめようと思っっているので、「人に」与えられている願いはわずかなこの世の望みだけではありません。このことから、わずかに「この世のことという」一つの満足を求めようとするのではなく、「現世では」得ることができないものを求めるのです。試しに商業や殖産を行なっている者を見るに、金銀や宝石を

箱に満たし、その富は州県随一であっても、心は満たされることがありません。また仕官している者は、世俗の浮き名を求め、太平の好機をつかんで、官位爵禄を榮譽としてひたすら求めますが、たとい朝廷の高い位に昇り皇帝の左右に侍ることになっても、心は満たされることがありません。遂には天下を手に入れ万民に君臨して、子孫に幸いを遺すことになったとしても、心はやはり満足しません。このことは怪しむにたりません。すべて天主が人間に与えている心の思いは、無窮の寿命と無限の快楽であるからで、現世のわずかな楽しみによってしばらくでも満たされるものではありません。小さな一匹の蚊で「巨大な」龍や象「の腹」を満たすことはできませんし、わずか一粒で朝廷の倉を一杯にすることはできません。西洋の古代の聖人（聖アウグスティヌス）はこの道理を悟り天を仰いで嘆息して言いました、『万民の父なる天の主よ、あなたは私たち人間をあなたから創られました。あなただけが私の心を満たすことができます。人はあなた「のもと」に帰るまでは、その心が安らぎ満たされることはありません』と。

第四「の証明」。人は生来誰でも死者を怖れるものです。親戚や友人であっても、死んでしまうと平気でその遺体に近づこうとはしません。しかし、猛獣が死んでも怖れないのは、人の生来の靈妙さが本来の知覚⁴⁴を持っていて、人は死んだのちにも魂が存在して怖れるべきであるが、猛獣の魂は完全に消滅して留まって人を驚かすことがないということを知っているからです。

第五「の証明」。天主の「人間に対する」応報は公平無私なものであって、善なる者は必ず賞し、悪なる者は必ず罰します。現世においては、悪を行なった者が富貴や安楽を貪り、善を行なった者が貧賤や苦難をなめることがあります。もちろん天主はその人が死ぬのを待って、そのあとでその善なる魂を取って賞し、その悪なる魂を取って罰します。もし魂が肉体と共に滅びるならば、天主はどうしてその人を賞罰することができましようか」と。

13 中士が言った、「君子は現世において小人と異なっていますから、死後も小人と異なっているはずですよ。〔肉体の〕生死が同じであるならば、異なる理由は魂にあるはずですよ。ですから、ある儒者は次のようなことを言っていま

す。『善なる者は道によって本心を保持するから、肉体が死ぬと心は消滅しない。悪なる者は罪によって本心を破壊するから、肉体が死ぬと心もこれに従って消滅する』と。こうした説も人を善に誘うことができるのではないでしょうか」と。

14 西士が言った、「人の靈魂は善惡に関わりなく、皆死後も滅びることがありません。万国の人々がこのことを信じており、天主の經典（聖書）にはこのことが記されています。私は幾つかの道理でそのことを証明しましょう。善人悪人によって「魂を」區別するということは、經典にも載っていませんし、道理にかなつたものでもありません。この世の重大事について輕率に新説を立て笛や太鼓で騒ぎたて、益々人々を惑わすようなことをしてはなりません。善を勧めて惡を阻むのは、賞罰の常道です。どうしてこれを捨てて他の詭弁を弄しましょう。人魂は砂でも水でもないので、集散することができませんか。魂は靈妙なものです。一身の主宰であり、肢体の原動力です。靈妙な魂によって肉体が滅びるといふことは可能であっても、肉体によって靈妙な魂が滅びるといふことはどうして可能でしょう。もし惡なる行爲が本心を消滅させることができるのであれば小人は必ず長生きできません。しかし、若い時から歳をとるまで惡を行なつてやめない者がいます。どうしてその心が消滅することなく、生きているのでしょうか。心は肉体にとって血よりも重要なものです。血が消滅すれば肉体は立っていることができないのですから、心が消滅すれば、肉体はどうして動くことができませんか。まして、心は肉体よりも堅固なものです。惡を我が身に行なつて、肉体が滅びることがないのに、どうして心だけが消滅することができませんか。もし生きている時に心が滅びるのであれば、どうして死後を待つことがありませんか。造物者は、「人の行ないが」善であるかどうかでその「人の」本性を変えることはありません。鳥獸の本性は永遠不滅なるものではなく、その中に善なるものがいたとしても、鳥獸はそれによって永遠不滅にはならないのです。惡魔の本性は永遠不滅なるものです。たとえ惡を行なつても、惡魔がそれによって消滅することにはならないのです。ですから、惡人の心がその惡によって消滅することがありえましょ

うか。もし悪人の魂が滅亡の刑罰を受けるならば、その刑罰は公正なものではありません。もとより天主によるものではありません。思いますに、重罪には等級があります。全てを罰して滅ぼすべきでしょうか。まして、滅ぼされたものは無に帰してしまうのですから、何の艱難も辛苦もありません。刑罰を受けることもなく、罪も「罰から」免れるのですから、これは世の中の人が「罰を」怖れずに悪を行なうようにさせ、悪を行なう者が「罰を」怖れずに益々その悪を行なうようにさせるものです。聖賢が言われる『心が散る』『心が亡ぶ』というのは比喻です。例えば、心がふらふらと外界のことがらを追いかけて専一でないのを『心が散る』と言い、内面の本性のことを務めずに外面のことに逸脱しているのを『心が亡ぶ』と言うのであって、本心に心が散らばったり亡んだりするものではありません。善なる者が心に徳を納めて美しく飾り、悪なる者が心に罪を納めて醜く汚すようなものです。この本性は肉体と精神を併せ持ちますが、私が自分で結び併せたものではなく、天主が私に付与して人としたもので、散滅する場合も私「の力」によるのではなく、必ず天主「の働き」によるのです。天主が我々の肉体を一年で滅ぼそうとするならば、「肉体は」一年で滅ぶので、永久に生きることはできませんし、靈魂を永遠不滅なものにしようとするならば、我々がそれを滅ぼすことはできません。「その本性を」自分でどのように用いているかということ振り返り、よく用いているならば安泰であり、誤って用いているならば危険です。我々が本性を受けているのは、黄金を持っているようなものです。この黄金を用いて祭神の爵を造ったり、あるいは汚穢を入れる盤を造ったりします。いずれも自分でするのです。しかし、汚穢を入れる盤だけが黄金でないことがあります。心に光を増すならば、遂には天国の大いなる光に至ることもできますし、心に闇を増すならば、遂には地獄の大いなる暗闇に墮ちることになります。誰がこの道理を否定できませんよう」と。

15 中士が言った、「ああ、今はじめて私は人が鳥獸に異なっている点が僅かではない⁽⁴⁸⁾ということを理解しました。靈魂不滅という道理は、この上なく正しく、明らかなものです」と。

16 西士が言った、「自分の行ないが鳥獣のようであることを願ひ、「人と鳥獣の」二つの本性が異なることを知らない者は愚かです。高潔な人物の志は人並み以上のものです。自らが低い部類のものと同等であることを願うことなど決してありません。聡明なわが友、あなたは「天主の」尊いみ旨と合致しておられ、お言葉も人並み以上のものです。しかし、「人と鳥獣の」本性は非常に異なっていますから、行動や態度は決して近づいてはなりません」と。

【注釈】

(1) 『礼記』礼運には「聖人は天地に参じ、鬼神に並び、以て治政す」と、『礼記』孔子閑居には「三王の徳は、天地に参たり」と、『礼記』経解には「天子は天地と参たり」とある。また『中庸章句』第二十二章には「唯だ天下の至誠のみ能く其の性を尽くすを為す。能く其の性を尽くせば、則ち能く人の性を尽くす。能く人の性を尽くせば、則ち能く物の性を尽くす。能く物の性を尽くせば、則ち以て天地の化育を賛くべし。以て天地の化育を賛くべければ、則ち以て天地と参たるべし」とある。朱子は「天地と参たるとは、天地と並び立ちて三と為るを謂うなり」と注釈している。なお、この「人参天地」という表現は、医書にもしばしば見られる。例えば、『靈枢経』では「経水第十二」「邪客第七十一」「刺節真邪第七十五」「歳露第七十九」などに見える。

(2) 明末の三教一致論者である林兆恩(一五二七—一五九八)は「人身乃一天地」ということをしばしば主張しているが、その著『九序摘言』(『林子三教正宗統論』所収)の「其四曰、安土敦仁、以結陰丹」の注に「人身一小天地」という表現が見られる。(福田殖氏の御教示による。)

(3) 原文には「日従其所欲爾矣」とある。『論語』為政篇に「七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず」とある。

(4) 『論語』陽貨篇に「子生まれて三年にして、然る後に父母の懐より免る」とある。

(5) 『孟子』滕文公上篇に「或いは心を勞し、或いは力を勞す。心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治めらる。人に治めらるる者は人を食ひ、人を治むる者は人に食わる。天下の通義なり」とある。朱子は『孟子集註』で「此の『心を勞する者は人を治む』以下」四句は皆古語にして、孟子之れを引くなり。君子は小人無ければ則ち飢え、小人は君子無ければ則ち乱る」と説明している。

(6) 典拠は未詳。

- (7) 『韓非子』外儲説左上に「夫れ良薬は口に苦し」とある。
- (8) 原文には「如相盟詛」とある。『周礼』秋官司盟に「獄訟の者有れば則ち之れをして盟詛せしむ」とある。
- (9) 典拠は未詳。
- (10) 儒教では上下の關係にある者が互いに礼をもって親しみあうことを説く。例えば、『礼記』経解には「上下、相い親しむ、之れを仁と謂う」と、『孝経』開宗明義章には「先王に至徳要道有り、以て天下を順わす。民以て和睦し、上下、怨み無し」と、『孟子』梁惠王上篇には「上下、交も利を征すれば国危うし」とある。
- (11) 儒教では父子・君臣・夫婦・兄弟・朋友の五つの人間關係においてあるべきあり方が定められている。儒教倫理の根本である五倫で、父子の「親」（親愛）、君臣の「義」（忠義）、夫婦の「別」（役割）、兄弟の「序」（順序）、朋友の「信」（信義）のことである。『孟子』滕文公上篇に見える。ここでは、それらがすべて破られた状態を言う。
- (12) 「本来の心」は、原文には「真心」とある。元來仏教語であるが、程子の門人の謝上蔡が「人は須く其の真心を識るべし。孺子の將に井に入らんとするを見る時、是れ真心なり」と説いて以來、程朱学においても天理を本具した「本来の心」を表すものとして用いられる。（『近世漢籍叢刊』上蔡語録（中文出版社）所載の荒木見悟氏「解題」を参照。）
- (13) 原文には「朽蓬」とある。
- (14) 原文に「黒蠟」「徳牧」とある人物について、従來の邦訳では、佐伯好郎氏、後藤基巳氏ともに「ヘラー」「トム」と読み、人物を特定していないが、『辯天主實義』『THE TRUE MEANING OF THE LORD OF HEAVEN』等により、「ヘラクレイトス」と「デモクリトス」と解釈した。ヘラクレイトス (Herakleitos) は、前五三五頃～四七五頃のギリシアの哲学者。万物の根源は火であり、永遠の生滅・変化の中にある（「万物は流転する」と説いた。孤高の生涯を送り、「泣く哲学者」「暗い人」と称される。デモクリトス (Demokritos) は前四六〇頃～三七〇頃のギリシアの哲学者。万物は原子の結合と分離の運動によってあると説いた。「笑う哲学者」と称される。従って、ここに「ヘラクレイトスはいっても笑い、デモクリトスはいつでも泣いていました」とあるのは、表現が反対になっていると言える。なお現代中国語では「赫拉克利特」「徳謨克利特」と表記する。
- (15) どここの習俗か未詳。
- (16) 『新約聖書』の「フィリピの信徒への手紙」3章20節に、「しかし、わたしたちの本国は天にあります」とある。また、同じく「コリントの信徒への手紙」5章1節に、「わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建

物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものでない天にある永遠の住みかです」とある。（聖書からの引用は、日本聖書協会の『聖書』新共同訳による。）

(17) 原文には「天民」とあり、「天が生じた民」の意味である。例えば、『孟子』万章上篇に「予は天民の先覚なる者なり」とある。

(18) ここまでの文章は、「はじめに」で指摘したように、『畸人十篇』の第二「人間にとってこの世は仮住まいにすぎない」（人於今世惟僑寓耳）の文章とほぼ同様の内容である。『畸人十篇』ではこの後に西士の言葉がしばらく続き、馮琦の言葉が入る。

(19) 原文には「天堂地獄」とあるが、いずれも仏教用語である。天堂は六道（衆生が自らの業くさによって生死を繰り返す迷いの世界。すなわち、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天）の一つである天道を指すこともあるが、ここでは、悪行の結果としての地獄に対して、善行の結果として生ずべき天を指す。地獄は同じく六道の一つで、悪業を積んだ者が堕ちて、様々な責め苦を受ける所である。4に見るように、マテオ・リッチは天主教の「天国・地獄」を「天堂・地獄」の語でもって表現する。

(20) 原文には「儒者亦禁人乱法殺人」とある。イエズス会士による最初の漢訳十誠である「祖伝天主十誠」の第五誠には「莫乱法殺人」（法を乱して人を殺す莫かれ）とある。

(21) 原文には「天主天堂地獄之義」とある。

(22) 原文には「人之精霊、常生不滅」とある。

(23) 中国においては古来「魂」は陽で精神を司り、「魄」は陰で肉体を司るものであり、死ぬと両者は離散して、魂は天に魄は地に帰ると考えられた。例えば『礼記』郊特性に「魂気は天に帰り、形魄は地に帰る」とある。

(24) 原文には「三品」とある。以下、「下品」「中品」「上品」とある。この三魂説は、古くはアリストテレスの『靈魂論』に見える。

(25) 「目の機能」以下四つの「機能」は、原文には「目司」「耳司」「鼻司」「口司」とある。

(26) 原文には「本用」とある。

(27) 原文には「火氣水土四行」とある。

(28) 原文には「神」とある。以下「靈妙なもの」と訳す。

- (29) 原文には「有形之魂」とある。「生魂」「覚魂」を指す。
- (30) 原文に見える「私欲」「公理」は朱子学の概念でもある。朱子学においては人の心は天理（公理）の内在として性を具するが、氣質の要素によって人欲（私欲）の存在を免れないと考える。従って、私欲を滅ぼして天理を具現することが本来の自己を実現するための方法であるとされる。
- (31) ここで言う「人心」は「靈妙な本性」に従う心を意味し、人間特有のものでされるが、朱子学においては用法が異なる。一般的に「人の心」を表現することもあるが、朱子学においては特に『尚書』大禹謨の「人心は惟れ危うく、道心は惟れ微なり。惟れ精、惟れ一、允に厥の中を執れ」に基づいて、「道心」に対峙する概念として説かれることが多い。「一方は形氣の私から生じ、他方は性命の正に基づくものであり、だから人心は危うくて不安定であり、道心は微妙で見がたいものである」（『中庸章句序』）と朱子が説くように、「人心」は「天理を保持することができない心の状態」「天理に背反する可能性を持った心の不安定性」を表わす概念と言える。
- (32) 原文には「形性」「神性」とある。朱子学においては、「氣質の性」と「本然の性」を区別して説く。天理の内在として純粹至善な本性を「本然の性」と言い、それが氣質と合体してその制約を受けるのを「氣質の性」と言う。従って、氣質に制約されないために「氣質の変化」が必要になる。前項の「道心」に純一化すること、精一の功夫も同様の目的を持つ。
- (33) 原文には「天神」とある。第二篇の注釈（26）を参照。
- (34) 一雉は高さ一丈、長さ三丈の城壁の大きさを表わす。
- (35) 第七篇には、靈魂が「司記含」「司明悟」「司愛欲」の三つの働きを持つことが述べられている。記憶、理性、意志の働きのことである。同篇では「司明」「司愛」と略しているのを、本篇では「司悟」「司欲」と称している。なお、これらについては『靈言蠡勺』（本稿「はじめに」を参照）に詳述されている。
- (36) 原文には「肉心之知」とある。
- (37) 原文には「無形之心」とある。
- (38) 原文には「人心皆欲伝播善名而忌遺惡声、殆與還生不侔」とある。「還生」について、『綴天主實義』は「蠢愚的鳥獸」と訳し、英訳も同じであるが、根拠がはっきりしない。後藤基巳氏は「正確な意味は不明」としながら、「再生を求める心」の意味かとして、「人の心はみな善い名声を後世に伝え悪名を避けようとすることは、再生を願う心よりも甚だ

しいものです」と訳している。「還生」は「再生」のことであるから、「おそらく再び生まれて、そこでやり直しができる」とはわけが違って、現世の行ないが後世にそのまま残ることになります。ですから、現世において名声を得ようと懸命に努力するのは「この文脈に理解した。」

(39) 原文には「休養」とある。

(40) 原文には「事死如事生、事亡如事存」とある。『中庸』第十九章に「死に事うること生に事うるが如くし、亡に事うること存に事うるが如くするは、孝の至りなり」とあるによる。

(41) 原文には「上帝降生万品、有物有則」とある。『詩経』大雅、烝民に「天の烝民を生ずる、物有れば則有り」とある。

『孟子』告子上篇にもこの句を引用する。

(42) 原文には「上帝公父」とある。

(43) 聖アウグスティヌスの『告白』第一巻第一章に「しかも人間は、あなたの取るに足らぬ被造物でありながら、あなたをたたえようと欲する。あなたは人間を呼び起こして、あなたをほめたたえることをよろこびとされる。あなたは、わたしたちをあなたに向けて造られ、わたしたちの心は、あなたのうちに安らうまでは安んじないからである」とある。また、同書同巻第二章には「存在するものはすべてあなたなしには存在しないのであるから、存在するものはすべてあなたをいれることになるのであるか。そうだとすると、わたしも存在するものであるから、あなたがわたしのうちにはいってこられることをこいねがうわけがあるのだろうか。わたしは、あなたがわたしのうちにはいってこられないなら、存在しないのである」とある。(以上、服部英次郎訳、岩波文庫、一九七六年による。)なお、聖アウグスティヌスの名は首篇16に見える。首篇の注釈(13)を参照。

(44) 原文には「良覚」とある。この「良」は「良能良知」の「良」に同じく、「生まれながらの」「本来の」の意味。

(45) 原文には「天主正経」とある。第八篇の8には「天主經典」とある。聖書は一般には「聖經」と表現される。

(46) 原文には「魔鬼」とある。「天神」(天使)に対する。

(47) 『孟子』には次のように、「心を放つ」「放心」「本心を失う」という表現が見られる。告子上篇には「孟子曰く、仁は人の心なり。義は人の路なり。其の路を捨てて由らず、其の心を放ちて求むるを知らず、哀しいかな。人、鶏犬の放たること有れば、之を求むるを知るも、放心有れども求むるを知らず。学問の道は他無し、其の放心を求むるのみ」と、また「此れを之れ其の本心を失うと謂う」とある。『春秋左氏伝』定公十五年の伝には「心、已に亡びたり」とある。ま

た、『大学』伝七章には「心、焉に在らざれば、視れども見れず、聴けども聞こえず、食らえども其の味を知らず」という表現も見える。いずれも、心が自己のものとしてしっかり保持されていない状態、つまり自己が自己として自覚され、自立することができていない状態を表現したものである。

(48) 『孟子』離婁下篇には「人の禽獸に異なる所以の者は幾希のみ」とあり、朱子は「幾希」を「少ない」の意味に解釈する。ここでは、その表現をひっくりかえして、「幾希に非ざるなり」とする。